



イスラエル日本学会のメンバーたち。左から入目はベニリアミ・シロニー元ヘブライ大学名誉教授、関3人目は青田博哉東京大学副学長。筆者・ロテム教授は石から2人目

昨年発足したイスラエル日本学会は活発に活動を展開している。設立の経過や活動ぶり、今後の展望などについて、設立者の一人であるハイファ大学のロテム・コーネル教授に寄稿していただいた。

イスラエル日本学会 (IAJS)

昨年設立 着々と活動

ハイファ大学教授 **ロテム・コーネル**

80年代 若者は 日本の経済発展に 関心を持ち始めた

◇「日本学会設立」の経過

イスラエル日本学会 (Israeli Association for Japanese Studies) は昨年設立されました。設立までには長い準備期間が必要でした。それは1952年にイスラエルと日本の外交関係が樹立されたことに始まります。その4年後の56年に外務大臣モシェ・シャレットが初めて日本を公式訪問し、天皇陛下に謁見しました。彼は、日本訪問の素晴らしい印象について自伝にも記しました。しかし、当時イスラエルの一般市民は日本についての知識もなく、関心もほとんどありませんでした。

60年代のイスラエルは、徐々に国家としての生存問題を克服して、アジアとアフリカに興味を持ち始めました。その経過の中で、エルサレム・ヘブライ大学に東アジア学部が設立されました。そこには、日本学科と中国学科が存在しました。

イスラエルの若者たちは、80年代に日本の経済発展に関心を示し始めました。当時、軍隊を排除した後、インドと東アジアの旅行に行くことが流行になりました。日本に滞在した若者たちは日本文化について深く知ることを望み、無国籍、大学の日本学科に進みました。

こうした学問的要求に応じて、テルアビブ大学は1985年に、ハイファ大学も2002年に東アジア学科を設立しました。その時以来、各大学の学科は特別な研究分野を育みました。ヘブライ大学では古代史、テルアビブ大学では宗教と文化、ハイファ大学では現代史、経済学と政治学が中心になりました。